

---

# マサイのピンポン

— — —

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マサイのピンポン

### 【Nコード】

N8356C

### 【作者名】

――

### 【あらすじ】

中村由紀子は、運命に導かれたのか、シベリアンハスキーのマサイと出会う。なんと、家へ連れてきたそのとき、おしっこをするマサイにつられて由紀子も漏らしてしまった。由紀子はマサイの心に影響されていることに気付く。お互いの心の中を覗き合える由紀子とマサイの物語。

## プロローグ（前書き）

犬の心が見えたら。

犬は言葉を使いません。

心を覗けたと言っても会話は存在しません。

どうやったら、お互い理解しあえるか。

理解できれば、いったいどうなるのか。

## プロローグ

### プロローグ

細かな格子にガラスがはめ込まれたドアには小さな木の看板がぶら下げてあった。

その看板の上の方には（RUPAN）の文字と、その下に小さく（YM探偵事務所）と書いてある。

この看板を裏返すと（準備中）と書かれているのだが、この小さな喫茶店の名前はこの看板以外どこにも書かれていない。

気を付けていないとそこに喫茶店があることすら気付かず通り過ぎてしまいそうな、目立たないタバコ屋と隣り合わせの古い店だった。

一人の青年が、そのドアの前に立ち止まると、注意深く辺りを見回しその中へ入っていった。

少し暗めの店内には、通路をはさんで右手にカウンター、左には三つほどのテーブルの席がある。

入ってきた青年をカウンターのの中からマスターが、そしていちばん奥の暗がりからは大きなアイリッシュセッターが迎えてくれるのだった。

濃い琥珀色のその犬はマスターの愛犬ホームズだ。

「おや星さん、いらっしやい」

マスターは親しげに青年へ声をかけた。

青年は星一横須賀警察署刑事課の刑事だった。

星刑事は少し真剣な表情で「中村さんは来ていませんか？」

「ユキちゃんならもうすぐ来ると思うけど、何か用事？」

星刑事は少し迷うそぶりを見せたが、マスターに打ち明けるように「由紀子さんに依頼したいことがあるんですよ」

「依頼って、YM探偵事務所？」

「はい」

それを聞いたマスターが少し緊張した表情に変わると「我々のルールは分かっているよね」意識して冷たい口調でそう言った。

「もちろんですよ、私も仲間ですから」

そのとき「よっぽど難しい事件みたいだね」いつの間にか隣のタバコ屋の主人、とめ子がルパンの入り口に立っていた。

「とめさん立ち聞かい」

マスターの声を無視するように、とめ子は星刑事のカウンター席の隣に腰を下ろすと「仲間内で依頼だなんて、ちゃんと料金は払ってもらうからね」

そう言つとめ子の前へマスターはだまってコーヒーを置くと「星さんはレモンティーだったよね」

「お願いします」刑事の割には、この店のマスターやタバコ屋のとめ子には低姿勢だ。

とめ子は、隣のタバコ屋とこの店の大家もしている、かれこれ七十にも手の届こうかと言う老婆であるが、いたって血色もよく目付きも鋭い。

壁一枚隣のタバコ屋の奥に一人で住んでいた。

その頃、中村由紀子はシベリアンハスキーのマサイを連れていつもの坂道を下っていた。

由紀子が坂の途中にある小さな社の前に来ると、手を合わせてお願い事をした。

『どうかルパンが開いていますように』と、開いていることなど百も承知していながら、そうお願いをしてまた坂を下っていった。

由紀子の傍らのシベリアンハスキー、マサイはリードや鎖もなく、由紀子に寄り添うように歩いている。

坂を下りきった角の電信柱の根元をマサイは臭いをかいでいる。

由紀子はそんなマサイにお構い無しにさつさと歩いて行ってしまうが、マサイはこれも由紀子に置いて行かれても気にも留めずに臭いをかいでいる。

しばらくすると、臭いの確認に満足したのか、右足を大きく上げ電柱にマーキングをし、由紀子を追いかけた。

由紀子は、その先の最近開店したブティックのショーウィンドウを眺めていた。

少し大人っぽい秋物に由紀子は見とれていた。

その後をマサイが通り過ぎていった。

由紀子は今年十九歳、浪人中だ。

両親には浪人中ルパンという喫茶店でウェイтрースのアルバイトをするということにしてある。

マサイは先にルパンへ到着すると、前足でドアをひっかいた。

「おや、来たみたいだね」とめ子は立ち上がるとドアを開けマサイを店の中へ入れた。「お前のご主人様はどこで道草食ってんだい？」マサイは店内を眺めると、店の中の様子と、星刑事の臭いのイメージを由紀子へ送った。

ショウウィンドウに映る物欲しそうな自分に気付くと、由紀子のため息についてショウウィンドウから離れた。

そのとき、マサイからのイメージがユキこの頭の中へ届いた。

『あら珍しい、星さんも来てるのね』次に星刑事の臭いだけのイメージをマサイが送ってきた。ルパンまで三十メートルほど手前である。

その臭いのイメージに由紀子は少し緊張した。

ルパンへ入るなり由紀子は「おはようございます、星さん私に用事ね、しかもかなり深刻な！」

こう言いながら入ってくる由紀子を他の三人は不思議そうな顔もせずに迎えた。

「ユキちゃんに依頼だつて、自腹切つて」マスターが星刑事のレモンティーを出しながら由紀子へ言った。

「あら、かわいそうに、でもこれって星さんが決めたルールですからね仕方ないわね」

「お願いします、今回はマスターとめ子さんにも協力してもら

うかもしれません」

星刑事は緊張した顔で、依頼内容を語りはじめた。

「この事件は、殺人事件に発展する可能性があります、そして当然この依頼内容は極秘です」

「でも」カウンターのの中からマスターが口を挟んだ「一応確認しておくけど、我々の捜査内容は真実だとしても、証拠にはならない場合があるよ、そのところは分かっているとは思うけど」

「もちろんです」そう言うと星はレモンティーを一口すすり、話し始めた。

由紀子とマサイは、互いの意思を通じ合わせることが出来る。

この特殊な関係は由紀子が高校二年生の秋に始まる。

しかし、本当の意味でマサイと由紀子の出会いを語ろうとすれば、それからさらに十二年の月日を遡らなければならない。

それは、由紀子が幼稚園へ入園する年の春だった。

横須賀の海を見晴らせる、物干し台でのおばあちゃんとのひなたぼっこからこの物語は始まる。

## 神様の育て方

### 1 神様の育て方。

「今日ね、一人で坂の下まで行けたんだよ」

「おや、えらかったねー」

咲き残るかすかな梅の香りが陽だまりの斜面をのんびりと昇ってくる。

眼下には横須賀の海が広がっていた。

二つ三つ小さな雲が張り付いた青空に、かもめが目の高さに舞っている。

ここは、見晴らしのよい二階の物干し台である。

由紀子はお婆ちゃんに抱かれてのんびり日課の日向ぼっこである。もうすぐ由紀子は近くの幼稚園へ入園してしまう。

孫との時間が少なくなるようで少し寂しい。

由紀子の頭へ顔を寄せ細いしなやかな髪のおいを吸い込んでみた。

由紀子の住む家は海を見晴らす山の中腹にあり、物干し台からは海を一望することができた。

天気の良い日には日向ぼっこをするお婆ちゃんの膝の上でいろいろな話をしてもらった。

「幼稚園に入ったらね、あの坂を一人で上がつたり下りたり出来なきゃ駄目なんだって」

「そうだね、もうすぐユキちゃんも幼稚園のものね、はいねー」

「本当は、ママが送ってくれるんだけど、ママが忙しいときには一人でお迎いのバスまで行くんだよ」

「それじゃあね、お婆ちゃんがいいことを教えてあげようね」

由紀子の頭をなぜながら、お婆ちゃんは何か心に決めたことでもあるように由紀子にゆっくりと話し出した。



「どんなこと？」

由紀子は顔を真上に向け、お婆ちゃんの顔を下から覗き込んだ。

「あのね、神様の育て方」

「かみさまのそだてかた？」

お婆ちゃんは由紀子の目を覗き込むと少しにつこりと笑い、また海のはうへ視線を戻しゆつくりと話しはじめた。

「坂の途中に小さなお家みたいなのがあったでしょう」

「うん、知ってるよ神様のおうちでしょ、ママが言ってた」

「そうそう、ユキちゃんこれから毎日、あの神様のおうちの前を通るでしょ」

「うん」

由紀子の家への坂道の途中には小さな石の祠が祭ってあった。

「その神様のおうちにはね、小さな神様が住んでいるの」

「ちっちゃい神様？」

「そう、小さな小さな神様」

「ふーん」

どこかで鶯の芝鳴きが聞こえていた。

「ユキちゃんと同じ子供の神様がね」

お婆ちゃんは由紀子の髪の毛をなでつけながら、ゆつくりと話を続けた。

「これからユキちゃんは幼稚園へ行つて、それから小学生になって、大人になるまで何回もあの神様の前を通るでしょ」

「うん」

風はまだ少し冷たかったけれど、陽だまりの物干し台は暖かな光に包まれていた。

「お出かけのときや、幼稚園に行くとき神様の前を通ったら必ず何かお願い事をしてから坂を下りるのよ」

「お願い事って、どんな？」

「何でもいいんだけどね、二つだけ大切なきまりがあるの」

「きまりって？」

「まず、一つ目は、必ず叶うお願いをすること」

「必ず叶うお願い？」

「そう、大切なことなの」

遠くで船の汽笛が聞こえていた。

『パパのおふねかな？』由紀子はお婆ちゃんの話聞きながら、そんなことも思っていた。

由紀子の父親は、海上自衛官である、一年のうち半分以上を船の中で暮らしていて、家へ帰ってくることは少なかった。

「二つ目はね、必ず叶うお願いをして下りたんだから、帰ってくるときにはお願いは叶っているでしょう」

「うん、そうだね」

「だから帰りには、お願いを叶えてくれたお礼をするの」

「おれい？」

「そうよ、心の中でね、願いが叶いましたありがとうございます。ってね」

「でも、どんなお願いをすればいいの？だれだれちゃんに会えますようにって？」

「うーん、それじゃあその子が休んじやったらお願いは叶わないでしょ、だから、みんなに会えますように。ってすれば」

「あー、そうか」

「大切なことは、必ず叶うお願い」お婆ちゃんは少し力を込めて言った。

「必ず叶うお願い」由紀子は少し難しそうな顔で反復した。「でも、どうしてそんなお願いをするの？」

「ユキちゃんはお母さんにほめられると嬉しいでしょ」

「うん、今日も一人で下まで行けたからほめられたよ」

「神様もおなじ、小さな神様だから、簡単なお願いをして叶えてくれたら、お礼を言つと喜んでくださるの」

「ふーん」

「そうすると、神様は少しづつ育ってきて、いつかは立派な神様

になるかもしれないでしょ」

「そうしたら、本当の願いをしてもいいの？」

「さあね、どうなるかは神様次第だけど、きっと良いことがあるよ」

高校二年生になった由紀子は、坂を駆け上り祠の前でとまると足元にカバンを置いて祠に向かい両手を合わせた。

『今日、少し記録が伸びました、ありがとうございます』

心の中でお礼を言くと、カバンを拾い上げ、また家までの上り坂を駆け上がって行った。

由紀子は、高校では陸上部に入り、長距離走を専門に練習していた。

次の大会へむけ、今日はタイムの測定の日だったのだ。

少し難度の高いお願いだったが、由紀子には自信があった。

あの物干し台からの眺めは、今も変わってはいなかったが、もうお婆ちゃんはこの世の人ではない。

由紀子がまだ小学生の五年生の冬だった。

お婆ちゃんの最後の入院のとき『早くお婆ちゃんの病気が治りますように』とお願いをしたが、神様は叶えてはくれなかった。

今まで毎日毎日お婆ちゃんから教わったとおり、必ず叶うお願いと、そのお礼を繰り返してきたのに。

神様はお婆ちゃんを助けてはくれなかった。

それからしばらくはお願いもお礼も止めてしまったが、そんなある夜、夢の中に死んだお婆ちゃんが現れたのだった。

夢の中のお婆ちゃんは手に大切そうに何かを包み込んでいた。

その手の中には小さなネズミくらいの生き物がピーピーと甲高い声で鳴いているのだ。

夢の中でお婆ちゃんは何も言わなかったけれど、お婆ちゃんの手の中で鳴いているその小さな生き物が由紀子の育てた神様で、由紀子の難しい願いを叶えて上げられなかったことを悲しんで泣いているのだと、なぜだか理解できた。

そして高校二年生の今日まで、由紀子は休む事無くお婆ちゃんの教えを守ってきたことになる。

「今頃、神様は子犬くらいにはなったかな」これが由紀子の今の感想だった。

いまでは、お願い事を叶えてもらう為にしているのではなく、生活習慣になっってしまったっている。

お願い事を忘れると、一日気持ちが落ち着かないのだ。

そして、由紀子なりにお願いの仕方を工夫するようになった。

それはお願いの難度をたまに少し上げてみることであった。

今日の記録更新のお願いも、やや高難度のお願いといつていい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8356c/>

---

マサイのピンポン

2010年10月21日15時59分発行